〔書評〕

三浦俊介著『神話文学の展開―貴船神話研究序説―』

原田信之

本書『神話文学の展開―貴船神話研究序説―』は、著者のライフワークである御伽草子『貴船の本地』の研究成果を集大成したものである。内容は、第Ⅰ部「貴船の神々と神話」、第Ⅱ部「古代中世の神話文学」、第Ⅲ部「中世神話『貴船の本地』論」と大きく三部に分けられているわけであるが、書名にも使われているように、「神話文学」をキーワードとして論を展開している。本書が研究対象としている貴船神社は、弘仁九年（八一八）五月に大社に列せられた（『日本紀略』）古社で、現在の行政区分では京都市左京区鞍馬貴船町に鎮座している。賀茂川の水源の地に祀られていることから、古くから祈雨・止雨の神として信仰された。著者は「民間神話」と「仏教神話」をふまえて「神社神話」という用語を新造している。新造語「神社神話」は、「神社の神職もしくは神社・聖地周辺の奉斎者（例えば貴船神社における舌一族）が神話を感得・創作・収集・編集して新たな神話を管理喧伝する時代があったと考えて設定したもの」（「はじめに」）だという。

本書は、一九八八年から二〇一九年までの三十一年間にわたって執筆された十五編の論文がまとめられている。本書の構成と執筆年は、以下のとおりである（「新稿」は刊行年の二〇一九年とした）。

第Ⅰ部　貴船の神々と神話

第一章　神社神話の遡源―貴船神社の神話（1）―（二〇一九年）

第二章　神社神話の降臨―貴船神社の神話（2）―（二〇一九年）

第三章　神々の尻尾―神社名における「尾」の意味―（二〇一九年）

第Ⅱ部　古代中世の神話文学

第一章　記紀神話の構成―神話対照表を読む―（二〇一九年）

第二章　中世神話と和歌・注釈書―藤原良経「天の戸を」歌と天岩戸神話異伝―（一九九二年）

第三章　仏教神話の転生―四天王・吉祥天女前生譚―（一九九四年）
第四章　仏教神話の軌跡―美女を救った技能者たち―（一九九四年）
第Ⅲ部　中世神話『貴船の本地』論
第一章　鬼の名と『法華経』（一九八八年）
第二章　転生再会の方法（一九九八年）
第三章　地鎮の呪法―家を七七に造ること―（一九九八年）
第四章　鬼を食う五節供（一九八八年、一九九八年）
第五章　鬼殺しの年中行事―節分・門松・左義長―（二〇〇八年）
第六章　中世神話『貴船の本地』と貴船神社（二〇一九年）
補　論　漢字「鬼」と和語「おに」についての基礎的考察（二〇一一年）

では、以下、順を追って内容をみてゆくこととする。

第Ⅰ部貴船の神々と神話には、貴船神社の神話をめぐる三論文が収められている。第一章「神社神話の遡源―貴船神社の神話（1）―」は、貴船神社蔵『黄船社秘書』等に記載された「黄船遡源神話」について紹介し、貴船神社において「白髭遡源神話」を改作して「黄船遡源神話」ができたという仮説を立てている。第二章「神社神話の降臨―貴船神社の神話（2）―」は、貴船神社蔵『黄船社秘書』等に記載された、貴布禰大明神が天から降臨したという貴船降臨神話について記している。貴布禰大明神降臨時に随伴した「仏国童子」（丑市明神）という神は、貴船神社を長年にわたり奉斎してきた「舌氏」の祖先神であるという。黄船遡源神話や貴船降臨神話について、著者は、「舌」一族は、強大なカモ族が祀る賀茂別雷神社との確執の中で、自らの存在意義を高めるため、「白髭遡源神話」を基に「黄船遡源神話」を作り出し、その一方で、貴布禰大明神の降臨神話をも整備していったものかと推測している。『黄船社秘書』は舌宗富という社人によって宝暦四年（一七五四）以降に記されたものだというが、貴船神社伝承における「舌氏」の果たした役割が注目される。著者は、第Ⅰ部第一・二章で扱っている貴船神社の「神話」は「近世の神話」としているが、これは、『黄船社秘書』が近世期の成立ということからの判断であることがわかる。なお、著者は貴船神社蔵『黄船社秘書』全文の翻刻・公刊の作業を進めているという。公刊が待たれる。第三章「神々の尻尾―神社名における「尾」の意味―」は、貴船の三尾（「黒尾」「山尾」「川尾」）をはじめ、神社そのもの、もしくは神社に付属する摂社末社の名前における「尾」の意味について考察したものである。

第Ⅱ部古代中世の神話文学には、記紀神話、中世神話、仏教神話をめぐる四論文が収められている。第一章「記紀神話の構成―神話対照表を読む―」は、『古事記』『日本書紀』の神話列を一覧表にした「記紀神話対照表」をもとに、記紀間の神話の異同状況、全体構成、配列の法則について考察したものである。第二章「中世神話と和歌・注釈書―藤原良経「天の戸を」歌と天岩戸神

話異伝―」は、藤原良経「天の戸を」歌を通して自讃歌注を中心とする和歌注釈書において中世神話がどのような展開をしたかについて論じたものである。『自讃歌』は新古今時代の歌人十七人がそれぞれ自讃の秀歌を十首選んだという体裁をとった歌集で、百七十首からなる。自讃歌に加注した自讃歌注は三十系統以上、伝本は百を超える。著者は仲間たちと自讃歌注研究会を作り、約二十年間にわたって共同研究を続けたという。その成果は「自讃歌注研究会会誌1～9」（一九九三～二〇〇一年）として刊行されている。本章は、自讃歌注研究会での成果が反映されたものといえよう。第三章「仏教神話の転生―四天王・吉祥天女前生譚―」は、御伽草子「金剛女の草子」ほか諸書にみられる四天王・吉祥天女前生譚の展開について論じたものである。承徳三年（一〇九九）成立『毘沙門天王曼荼羅私記』に「四无量経曰」として引かれている四天王・吉祥天女前生譚が長編化し、物語化されて、江戸時代初期成立「金剛女の草子」へと展開されていったと述べている。第四章「仏教神話の軌跡―美女を救った技能者たち―」は、第三章を受け、話群「美女を救った技能者たち」が、古代インド、シルクロード周辺、中国、朝鮮、日本と伝来したと述べている。

第Ⅲ部中世神話『貴船の本地』論には、御伽草子『貴船の本地』をめぐる七論文が収められている。『貴船の本地』は室町時代の成立と推定されており、本三位中将と美しい鬼娘との出会いと死別、鬼娘の転生による再会などが描かれた、御伽草子の本地物の一つである。主要伝本は本文異同が著しく、著者は諸伝本をⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類に分類している。第一章「鬼の名と『法華経』」は、『貴船の本地』に登場する美しい鬼娘「こんつ女」の家族の名前についての注釈的研究である。美しい鬼娘の家族の名前は、概ね『法華経』陀羅尼品中の十羅刹女に由来し、父王「らんはさうわう」（慶応本。以下同）は十羅刹女の「藍婆」、母「ひらんは女」は十羅刹女の「毘藍婆」、姉「十郎こせ」は「十羅刹女」そのもの、妹「こんつ女」は十羅刹女の「皐諦」か、と述べている。第二章「転生再会の方法」は、転生再会型異類婚姻譚として、御伽草子『貴船の本地』、『鶴の草子（三冊本）』、擬古物語『あま物語』の三作品を紹介し、展開の相違について論じたものである。第三章「地鎮の呪法―家を七七に造ること―」は、『貴船の本地』の京都大学図書館蔵本と大東急記念文庫蔵本にみえる「七七四十九けん（間）に（の）いへ（ゑ）のものをとり」という記述についての注釈的研究である。著者は、真言宗「屋敷地取作法」、修験道『修験常用秘宝集』、九州地神盲僧「屋敷図」、日蓮宗『法華顕妙抄』などの近世呪術資料を検討し、「七七四十九間の家の物を取り」という記述は、家を建築するに当たり敷地を四十九に区画（地取・地割）したうえで土地の浄化儀礼を行う「屋敷地取作法」に当たるのではないかと推定している。第四章「鬼を食う五節供」は、『貴船の本地』に記された五節供の儀礼食の呪術性についての注釈的研究である。『貴船の本地』の大東急記念文庫蔵本にみえる「[五せつく]」を始めよとて、正月の餅は

鬼をもぎて食うといふ。三月三日の草の餅は鬼のししむらなり。五月五日のちまきは鬼のもとどりなり。七月七日の素麺は鬼のすじを断ちて食ひ、九月九日の酒は鬼の血をしぼりて飲むといふ」という記述について、各種中世資料を検討し、五節供の儀礼食は節食を鬼の身体の一部分に見立てて、それを食べれば悪鬼の難から逃れられると信じられていたらしいと述べている。第五章「鬼殺しの年中行事―節分・門松・左義長―」は、ハーバード大学付属フォッグ美術館蔵『貴船の本地』に記された節分・門松・左義長についての注釈的研究である。第六章「中世神話『貴船の本地』と貴船神社」は、『貴船の本地』巻末にみえる、主人公夫婦がともに長寿の末に貴船の神となったと明かす部分、「物語読誦の功徳」を説く部分について考察したものである。補論「漢字「鬼」と和語「おに」についての基礎的考察」は、漢字「鬼」の字義と和語「おに」の語源について考察したものである。第Ⅲ部での検討を通し、著者は、「『貴船の本地』は、鞍馬寺の横に鎮座し、『法華経』十羅刹女の信仰を踏まえており（本書Ⅲ一）、特殊な地鎮の呪法（Ⅲ三）に精通し、「鬼を食う」五節供（Ⅲ四）や「鬼殺し」の年中行事（Ⅲ五）を提唱した法師陰陽師・唱門師たちによって書かれたと考えられる」（Ⅲ六）と総括的に述べている。この総括的部分で少し気になるのが、特殊な地鎮の呪法（Ⅲ三）、「鬼殺し」の年中行事（Ⅲ五）の部分を『貴船の本地』全体のものとしてまとめている点である。Ⅲ三地鎮の呪法の記事は京都大学図書館蔵本と大東急記念文庫蔵本の「二伝本以外の伝本には見えない独自異文」であり、Ⅲ五はフォッグ本の記述についての検討である。『貴船の本地』は伝本ごとの記述の差が大きいことから、『貴船の本地』伝本全体に共通する特徴と、伝本ごとの特徴については分けて考える必要があるため、今後さらに伝本ごとの詳細な検討がなされることが期待される。

以上、簡単に内容をみてきた。本書は新造語「神話文学」をキーワードとして、第Ⅰ部は貴船神社が管理してきた神社神話、近世神話について、第Ⅱ部は記紀神話、中世神話、仏教神話について、第Ⅲ部は中世神話としての御伽草子『貴船の本地』について、それぞれ論述されていた。本書の中核部分は第Ⅲ部中世神話『貴船の本地』論で、『貴船の本地』本文の注釈的研究となっている。一編一編が読みごたえのある論考で、本書に記された研究成果は、日本文学のみならず関連諸学に多くの示唆を与えてくれる好著といえよう。

（思文閣出版　令和元年六月　四四五頁　本体価格　一二、〇〇〇円）

（はらだ・のぶゆき　新見公立大学教授）